

<実践研究>

特別支援学校における学校運営協議会を通じたカリキュラム・マネジメントの実践

— ファシリテーションのスキルを活用した企画・運営と分析 —

久保真喜子*・東内 桂子*・竹林地 毅**

特別支援学校小学部・中学部学習指導要領（文部科学省，2017）（以下，新学習指導要領とする。）では、未来の創り手である子供たちに必要な資質・能力を育成するため、学校と社会が連携・協働していくことや、社会に開かれた教育課程の実施が示された。また、教育課程の改善を軸とした学校教育の改善・充実の循環を生み出すカリキュラム・マネジメントの重要性も示された。一方、広島県においては、平成31（2019）年4月より、すべての県立学校が社会と連携・協働していくために、学校運営協議会を設置したコミュニティ・スクールとなった。

本報告では、広島県立呉南特別支援学校のカリキュラム・マネジメントの取組の現状やファシリテーションのスキルを活用した学校運営協議会の企画・運営による学校教育の改善・充実を目指した実践について報告する。

キーワード：カリキュラム・マネジメント 学校運営協議会 ファシリテーション

I. カリキュラム・マネジメントにおけるファシリテーションのスキルの活用

1. 新学習指導要領におけるカリキュラム・マネジメントに関する規定

特別支援学校小学部・中学部学習指導要領（文部科学省，2017）（以下，新学習指導要領とする。）では、特別支援学校におけるカリキュラム・マネジメントの実施について、各学校においては、校長の方針の下、校務分掌に基づき教職員が適切に役割を分担しつつ、相互に連携しながら、各学校の特色を生かしたカリキュラム・マネジメントを行うよう努めるものとされている。

また、各学校が行う学校評価については、教育課程の編成、実施、改善が教育活動や学校運営の中核となることを踏まえ、カリキュラム・マネジメントと関連付けながら実施するよう留意することが規定されている。また、学習指導要領解説総則等編（文部科学省，2018）においては、各学校は、児童生徒や学校、地域の実態を適切に把握し、Table 1に示す事項を通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくことが示されている。

つまり、カリキュラム・マネジメントとは、各学校が、教育目標をよりよく達成させるために、組織としてカリキュラムを創り、実施し、改善していく、継続

Table 1 カリキュラム・マネジメントの4つの事項（文部科学省，2018）

1	教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと → 教科横断的な視点から目的・目標の達成に必要な教育内容を組織的に配列し、教育活動の改善を進める。
2	教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと → 一連のPDCAサイクルを確立し、教育内容の質の向上を図る。
3	教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと → 地域等の外部の資源を含めて活用しながら効果的に組み合わせ、人的・物的資源等を効果的に活用する。
4	個別の指導計画の実施状況の評価と改善を、教育課程の評価と改善につなげていくこと → 学習の成果を的確にとらえる。

* 広島県立呉南特別支援学校

** 広島大学大学院教育学研究科特別支援教育学講座

的かつ発展的な課題解決の営みであると言える。

また、田村・村川・吉富・西岡（2016）は、カリキュラム設計の要は目標設定であるとし、目標を『目指す子どもの姿』として描き出すことにより、教職員も子どもとともに目指すことのできる具体的なものとなることや、学校教育目標の意識化が不十分な場合は、目標の共有化の方法を考える必要があることを指摘している。

2. ファシリテーションのスキルの活用

ファシリテーションとは、「集団による知的相互作用を促進する働きのことであり、集団による問題解決、アイデア創造、合意形成、教育・学習、変革、自己表現・成長など、あらゆる知的創造活動を支援し促進していく働きである」（堀，2003）。

本実践では、学校運営協議会構成員及び本校教職員それぞれの異なる知識や視点とそれに基づく多様な考えを生かして議論を深め、継続的かつ発展的な課題解決の営みとすることを目指した。そのため、ファシリテーションのスキルを活用することとした。

具体的には、学校教育目標を意識化し、学校運営のより発展的な取組についての情報の収集・整理の過程に MECE（Mutually Exclusive Collectively Exhaustive）思考（堀公俊，2003）を活用するとともに、集まった情報や意見をファシリテーション・グラフィックの1つであるロジック・ツリー（logic tree）により整理した。MECE 思考とは、情報収集、分析、アイデア創造のステップにおいて大切な、モレなくダブリなく検討を加えることである（堀，2003）。また、MECE 思考を深めるために欠かせないのが、ロジック・ツリーと呼ばれる図である。上位概念から下位概念にむかって階層状（ピラミッド型）に物事を並べ整理していくツリー図である。ロジック・ツリーを作る手順は、思いついたものからトピックを書き出し、後でツリー状に整理していく帰納的な方法と、これとは逆に、幹となる大きなトピックを書き出し、その下に枝を展開していく演繹的な方法がある（堀，2003）。

本稿では、広島県立呉南特別支援学校（以下、本校とする。）におけるファシリテーションのスキルを活用した学校運営協議会の企画・運営を通じたカリキュラム・マネジメントの実践について報告する。

II. 本校の概要

1. 学校概要

本校は、聴覚障害教育部門と知的障害教育部門の2

つの教育部門を有する特別支援学校である。昭和27（1952）年から設置されている聴覚障害のある幼児児童生徒を教育の対象とした広島県立広島南特別支援学校呉分校に、平成27（2015）年1月に、知的障害教育部門を設置し、校名を呉南特別支援学校と改め、現在に至っている。

呉市中心地の東側に位置する阿賀町にあり、北は灰ヶ峰、東は黒瀬川、西は休山、南は瀬戸内海と自然豊かな土地である。また、この地域は本校以外に、工場など第二次産業の企業が多くある。さらに、小学校、中学校、高等学校、工業高等専門学校、高等技術専門学校、大学が隣接して設置されており、これらの教育機関と地元自治会連携組織「阿賀地区地域教育連携協議会（アガデミア）」（以下、アガデミアとする。）があり、相互に連携した様々な地域活動に取り組んでいる。

本校は、平成27（2015）年の開校当初、79名であった幼児児童生徒数は年々増加し、令和元（2019）年度は185名となった。本校の強みは、聴覚障害教育部門と知的障害教育部門の両部門の幼児児童生徒が、行事や生徒会活動等を通して学び合い、相互理解が促されており、励ましあって助け合おうとする風土があることである。

2. カリキュラム・マネジメントの取組の現状

(1) 学校教育目標

聴覚障害、知的障害のある幼児児童生徒に対して卓越した専門性に基づく聴覚障害教育、知的障害教育を一貫して行うことにより、自律し社会に貢献する人材を育成する。

(2) 育てたい子供像（目指す子供像）

知：学習活動を通して、自ら学び伸びようとする子供

徳：人との関わりの中で、他者を尊重する心をもつ子供

体：健康で安全に生活できる知識と体力を身に付けた子供

言語活動：理解できる言葉を多くもち、自分の意思を伝えるスキルを身に付けている子供

(3) カリキュラム・マネジメントのための教育内容の改善

学校教育目標及び育てたい子供像を踏まえ、教育課程の見直し、改善に取り組んでいる。令和元（2019）年度からは、校長の諮問機関として、Table 2 に示す事項を目的とした「教育課程検討会議」を立ち上げた。

Table 2 教育課程検討会議の目的

1	学校経営計画「育てたい子供像」を実現するために、幼小中高で一貫性、系統性のある指導内容を目指して、学校教育目標、学校経営計画に基づいた教育課程の検討及び改善を行う。
2	広島版「学びの変革」アクション・プランを踏まえ、本校の「学びの変革」に係る具体的な取組を明らかにする。
3	学習指導に係るPDCAサイクルの中で、学習評価を通して授業の改善や教育活動全体の改善に向けて取組を進め、本校におけるカリキュラム・マネジメントを確立する。

Table 3 呉南特別支援学校学校運営協議会委員

氏名	所属（役職等）
竹林地 毅	広島大学大学院 教育学研究科特別支援教育学講座 准教授
佐藤紀代子	県立広島大学コミュニケーション障害学科 准教授
篠崎 賢二	呉工業高等専門学校 校長
佐古 隆則	呉市阿賀市民センター センター長
中野 正氣	呉商工会議所 専務理事
棚田 隆志	呉市教育委員会教育部学校安全課 課長
山根 直行	呉市社会福祉協議会 常務理事（兼）事務局長
山方 友栄	呉南特別支援学校 PTA 会長
東内 桂子	呉南特別支援学校 校長

教科等横断的な視点からの教育課程の改善を図るため、具体的には、以下のことを実行した。

- ①年間活動スケジュールを設定し、新学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえ、「指導段階の設定」を行い、教科書の選定方針を立てた。
- ②単元研究を行い、単元系統表を作成した。単元系統表を基に教育課程や年間指導計画を作成し、次年度に教育実践を行い検証できるようにした。

(4) 授業づくりの取組

毎年、教育研究テーマを設定し、校内研究授業、公開研究授業等に取り組み、教育内容の質の向上を図っている。次年度は、引き続き授業改善の取組を進めるとともに、新しい教育課程を実施し、PDCAサイクルに基づき改善し、教育内容の質の向上を図る予定である。

(5) 人的・物的資源等の効果的な活用

アガデミアの構成組織である呉市阿賀市民センターの協力を得て、呉市子ども町づくり事業に本校知的障害教育部門中学生徒が参加し、「つながり、つながる、阿賀の町～Kure South Garden プロジェクト～」に取り組んでいる。具体的には、阿賀地域の清掃活動や道路にある花壇に花を植えて育てる等の環境美化活動を行っている。

また、知的障害教育部門高等部の生徒が、アガデミアの構成組織である呉工業高等専門学校に出向き、校舎内の清掃活動に継続的に取り組み、感謝状の贈呈を

受けている。

さらに、呉市阿賀市民センターで行われる「アガデミア文化発表会」には、生徒会が中心となって歌唱発表を行い、地域の文化祭を盛り上げている。また、知的障害教育部門高等部の生徒が「阿賀地区文化祭」に、カフェ「ル・ポヌールくれみなみ」を出店しコーヒー販売・サービスを行い、作業学習で学んだ接客の内容を実践している。

Ⅲ. 学校運営協議会について

1. 学校運営協議会委員の構成

「広島県立学校における学校運営協議会の設置等に関する規則」（広島県教育委員会，平成31年3月22日）に基づき、学校運営協議会委員の構成を構想し、Table 3のとおり聴覚障害教育及び知的障害教育の学識経験者、アガデミア構成組織の関係者、地域の教育活動について専門的な意見の聴取が可能な関係機関の代表者、保護者代表によって構成した。

2. 第1回学校運営協議会について

第1回学校運営協議会では、Table 4 に示す次第によって、学校運営協議会についての法的根拠や仕組み、他県での実践例とその効果を含めて概要説明を行った。また、本校の教育課程を含む教育内容について説明を行った。

学校運営協議会の説明では、創意工夫を生かした特

Table 4 令和元年度第1回呉南特別支援学校運営協議会次第

1	開会 校長挨拶
2	第1回学校運営協議会概要 <ul style="list-style-type: none"> (1) 学校運営協議会の説明 概要及び法令 年間計画 (2) 委員自己紹介 (3) 協議会の会長及び副会長の選任 (4) 基本的な方針の承認（学校運営の目標・ビジョンの共有） <ul style="list-style-type: none"> ①学校経営計画の説明 ②教育課程の説明
3	校内見学（授業参観）
4	学校運営に関する議論 <ul style="list-style-type: none"> (1) 令和元年度の重点課題の説明 (2) 協議
5	閉会

コミュニティ・スクールだからできること

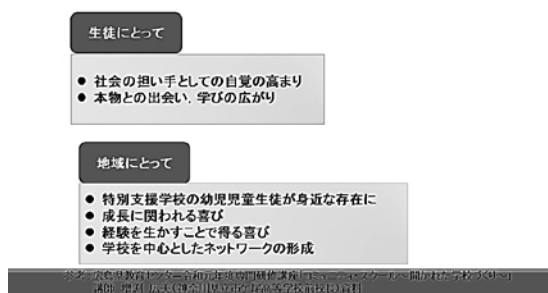


Fig. 1 学校運営協議会の意義①

コミュニティ・スクールだからできること

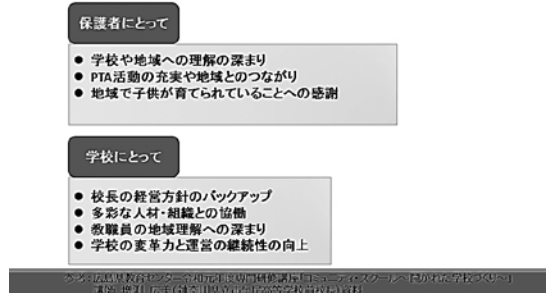


Fig. 2 学校運営協議会の意義②

色ある学校づくりが進むことは、Fig. 1、Fig. 2のように、構成員にも意義があることを示し、委員の中で学校運営協議会の意義・目的を共有できるようにした。

成果としては、学校運営協議会の意義・目的及び各委員の役割の理解が深まり、相互に利益のある連携を目指すことが確認できた。課題として浮かび上がったのは、本校の教育活動が外部にほとんど知られていないことであった。情報発信をより進めていく必要があることが分かった。

3. 第2回学校運営協議会について

第2回学校運営協議会については、「社会総掛かりで教育の実現を図る上で、地域でどのような幼児児童生徒を育てるのか、何を実現していくのかという目標やビジョンを共有し、『地域とともにある学校』へと転換していくことを目指し、協議を行う」ことを目的として、学校運営協議会委員と本校教職員が協議をし、本校の地域における現在の状態を理解するとともに、本校の未来を思い描くこととした。

そこで、第2回学校運営協議会を2部形式としTable 5に示す次第のとおり、第1部は、学校運営協議会委員で学校経営計画の自己評価の中間評価についての説明と質疑・応答、まとめを行い、第2部は学校運営協議会委員と本校教職員が、第1部での中間評価の説明と協議内容を説明し、「地域でどのような子供を育てていくか —それぞれの役割—」をテーマに、パネルディスカッションとグループ討議を行うこととした。

(1) パネルディスカッション

パネルディスカッション (panel discussion) とは、あるテーマについて、あらかじめ選ばれている複数の専門家 (パネリスト) が意見を述べた後に、一般の参加者も交えて進めていく討論会のことである。また、公開討論会の1つであり、あるテーマについて、まず数人の専門家が代表者として選出され、司会者のコーディネートの上に、聴衆の前で討議を行う。その後、聴衆も参加して、意見交換や質疑・応答が行われるという方式である。

テーマとそれに基づく主張を整理し、教職員に分か

Table 5 令和元年度第2回呉南特別支援学校運営協議会次第

【第1部】
1 校長挨拶
2 日程等の説明
3 令和元年度学校経営計画中間評価の説明
4 質疑・応答
5 中間評価まとめ
【第2部】
1 開会
2 パネルディスカッション
(1) 次第説明
① 議題テーマ説明
議題テーマ：「地域でどのような子供を育てていくか —それぞれの役割—」
② 学校経営計画中間評価の説明と協議内容についての説明
(2) パネリストの紹介
(3) 学校運営協議会委員からの提言（8人）
(4) 討議（8グループ討議、8グループ発表）
(5) まとめ
3 閉会

りやすく提示するために、パネリストである学校運営協議会委員の方々には、本校の幼児児童生徒のより良い成長のために、「地域でどのような子供を育てていくか —それぞれの役割—」をテーマに本校の教育活動への提言内容の「骨子」とその「キーワード」の事前アンケートを依頼した。

パネリストである委員の方からは、それぞれの立場における本校へ向けて期待を込めた提言内容骨子とキーワードが届いた。この提言内容骨子については、電子黒板にて提示し聴衆である教職員の理解がより進むようにした。提示したキーワード及び提言内容骨子については、Table 6のとおりである。

第2回学校運営協議会は、パネリストは4人であったため、4グループに編制し直し、グループ討議を行った。グループ討議では、「地域でどのような子供を育てていくか —それぞれの役割—」をテーマに、「① パネリストの意見で参考になったこと」「② 地域と連携して子供たちにどのような教育活動ができるか」の2つの柱に沿って討議を行った。そして、テーマについてグループで出た意見を発表しまとめを行った。

(2) まとめ

各グループからは次のとおりの発表があった。

①グループ

教職員間の交流で、地域の小・中学校に本校の教職員が見学に行く機会があるとよいと思う。地域の小・中学校の研究会の中に入って関わっていくこともできる。小・中学校の特別支援学級には、自立活動の学習

内容で悩んでいる教職員が多いため、特別支援学校の教職員が指導できるのではないかな。併せて生徒同士の交流があれば良い。

活動する意味付け、価値付けのために、地域のニーズは何か調査し、それが分かった上で活動をしていくのもよいのではないかな。地域の自治会長にインタビューしてニーズを調査するなどできるのではないかな。

本校を知ってもらうことについては、情報を発信していくことでニーズを知り、活動への意味付けが生まれてくる。地域の人材を活用することも大切である。

②グループ

本校の存在を地域の人に、あまり知られていないと感じる。就職のためではなく、知ってもらうために銀行やスーパーなどをどんどん使っていく、その上で、幼児児童生徒がどのように変わったかということ伝えたいと思う。また、校外清掃時に挨拶をすることでそこから関係づくりができると思う。

小・中学校はいろいろな学校があるのに、お互いのことをよく知らない。交流をすることにより少しずつ知っていくことが大切である。

③グループ

地域・社会のつながりは生徒だけでなく、教職員も必要であると思う。

校外での取組で力を付けることで限界を自分で決めずに挑戦する生徒が育てられるのではないかな。

地域の応援団づくりについて、学校の発信力が大切である。

Table 6 呉南特別支援学校運営協議会委員の提言内容

【竹林地 毅 様】	キーワード：地域との連携・協力、内面の育ち 提言骨子：他県の特別支援学校の実践、児童生徒の育ちについて
【佐藤 紀代子 様】	キーワード：社会経験ができる住みやすい社会、長期休みの子供たちの過ごし方 提言骨子：商店街、駅など子供たちと直接つながっている場所との交流を活発にする。 地域の子供たち、保護者同士の関わりの工夫
【篠崎 賢二 様】	キーワード：地域に根付く若者づくり、呉南学生と呉高専学生との相互交流 提言骨子：地域の高等教育機関としての役割 ・サイエンスに興味をもってもらう取組 ・高度なエンジニアリングの現状を知ってもらう取組 ・地域の製造業に興味をもってもらう取組 ・呉南特別支援学校対象学生たちとの対等な立場での交流を目指す ニーズやシーズのマッチング
【佐古 隆則 様】	キーワード：「生きる力」＝「地域力」 提言骨子：「様々な職業や人生を経験した地域の人材」や「奉仕から趣味・娯楽まで様々な地域活動」の活用（主体的に考え、未来を創っていく力）
【中野 正氣 様】	キーワード：実際に社会に出て、その力を発揮できる生徒に！！ 提言骨子：能力に応じた個別プログラムの実施 家庭、地域との連携が図れる諸活動の実施 呉市キャリア・スタート・ウィークへの積極的参加 「高等部オープン会」の地元企業への周知 広島県産業教育振興会への取組強化
【栩田 隆志 様】	キーワード：教職員間の交流 提言骨子：呉南特別支援学校のセンター的機能 ・呉市の小中学校への指導・助言や教育相談 ・呉南特別支援学校の授業の参観、呉市の小中学校への授業参観
【山根 直行 様】	キーワード：地域における生活支援、地域共生社会の実現に向けた取組、地域での役割のプランニング支援 提言骨子：自立し、自らの意思によって参加し活動できる環境づくり、頼り頼られる関係づくり、心豊かにする経験
【山方 友栄 様】	キーワード：地域の応援団づくり 提言骨子：呉南特別支援学校の子供たちの頑張る姿を見てほしい、知ってほしい。 ・親の思い：地域に貢献できる人に！

教職員同士の交流について、自分たちも外に出て情報交換をしていきたい。

④グループ

本校を知ってもらうために、目指す子供像や学校について理解し、地域の子供と共に育ってほしい。誇りやチャレンジできる場があると良い。チャレンジできる場では、人のためになること、喜んでもらえることをする。アガデミアの行事に参加したり、ゲストティーチャーを活用したりする、学校開放日をつけるなど。

期待することとして、達成感や信頼感を味わえること、Win-Winの関係が挙げられる。

課題として、地域のことをあまり知らない教職員も多いため、知っていく必要がある。

IV. ファシリテーションのスキルを用いたアイデアの整理

1. ロジック・ツリーによる整理

第2回学校運営協議会のグループ討議の内容を現在の本校の状況と比較し、ファシリテーションの技術を



Fig. 3 パネルディスカッション



Fig. 4 グループ討議でのアイデアの整理

活用し、次のように整理した。

まずは、グループ討議で出てきた多量のアイデアの内容について整理した。すると、Fig.4のとおり、3つのカテゴリーに分けて考えられた。

本校の情報を積極的に発信し、学校の認知度を向上する「1 地域へアピール」を進めていくことで、本校の幼児児童生徒や教職員も地域に出向き、地域を知り、一緒に活動する中で、Win-Winの活動を進める「2 地域とコラボ」の段階に進み、最終的には、本校の幼児児童生徒が、地域の一員として、地域にとって必要な存在になる「3 地域のパートナー」となることを目指していきたい。

そして、この取組を進める上で、グループ討議で出たアイデアの活動が、何のために、どんなことができ、その結果、幼児児童生徒の内面がどのように育ったかを、常に振り返り検証して進めていきたいと考える。

【資料1】のようにまとめ、校務運営会議に提案し、更なる具体案を出すこととし、次の3つの視点「どんなことができるか」「取り組む上での課題は何か」「これからすべきことはないか」をもって、更に深く掘り下げて校務運営会議のメンバーで考えた。

約50からなる具体案が集まり、ロジック・ツリーを活用して、【資料2】のとおり意見を階層的に整理した。

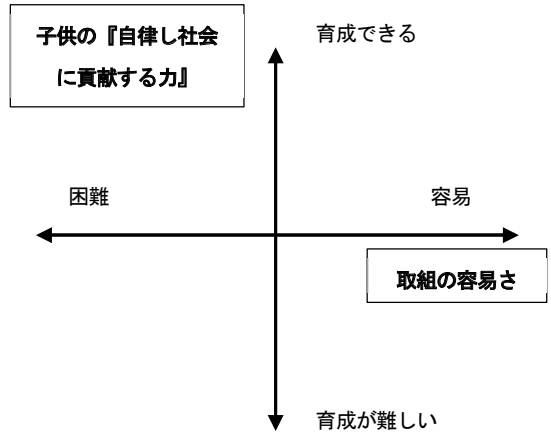


Fig. 5 マトリクスによる議論の軸の整理

2. ロジック・ツリーからマトリクスによる整理

ロジック・ツリーで整理した内容を、更に校務運営会議において議論を深めるために、ロジック・ツリーで整理された具体案をマトリクスで2つの側面から整理していった (Fig.5)。

議論の軸を本校の学校教育目標に示されている「自律し社会に貢献する力」と「取組の容易さ」とした。この協議を積み重ねていき、出された提言や意見から今後取り組んでいく方向性を出していくことを計画している。

V. 考察と今後の課題

整理した内容を見ると、本校の認知度を高め、地域とともに活動できる事柄や仕掛けは、多くあることが分かる。これらの内容を基に、第3回学校運営協議会において学校運営委員に今後の取組を投げかけ、実行に移していけるものから進めていく必要があると考えている。

地域と討議を重ねていくことで、更に新しい未来は広がるかもしれない。本校の子供たちが、「地域の一員として、地域にとって必要な存在になる」よう、地域と協力し協議し合って、取組を進めていきたい。

文献

- 堀 公俊 (2003) 問題解決ファシリテーター. 東洋経済新報社, 23, 46-47.
- 堀 公俊 (2018) ファシリテーション入門<第2版>. 日本経済新聞出版社, 23, 150-15.
- 増渕広美 (2019) 広島県立教育センター令和元年度専

門研修講座「コミュニティ・スクール～開かれた学校づくり～」資料。
田村知子・村川雅弘・吉富芳正・西岡加名恵編(2016)

カリキュラムマネジメント・ハンドブック. ぎょうせい, 61.

(2020. 2. 14受理)

【資料1】

第2回学校運営協議会討議内容のまとめ

1 地域へアピール（情報発信をし、学校の認知度の向上）

『知ってもらおう！ 来てもらおう！』

① 地域に出向いた活動

現在：清掃活動（アガデア地区、呉工業高等専門学校、大和ミュージアム等）
アガデア文化祭、広島県産業教育振興会、マラソン大会等へ参加
阿賀小学校との交流及び共同学習（聴覚障害部門）

例：
・小学校へ手洗いの方法を教えに行く。
・幼稚園に花壇（プランター）、ベンチを作りに行く。
・野菜の販売
・食堂
・呉市立呉高等学校の野球部のボールの修理

② 地域の人に来ていただく活動

現在：公開授業研究会、公開研修会、高等部オープン会等

例：
・地域の人にゲストティーチャー（昔遊び、部活動、絵本の読み聞かせ等）として来てもらう。
・地域の人が参加できる場面づくり

③ 地域に宣伝

現在：学校ホームページへ教育活動を掲載

例：
・本校の地域公開のフライヤー等の配布

『地域を知ろう！地域と一緒にやってみよう！』

2 地域とコラボ（Win-Winの活動）

① 本校と呉市の学校がお互いの研究授業や研究協議に参加し、特別支援教育を深める場づくり

② 地域の人と幼児児童生徒が、一緒に活動する場づくり

例：
・自治会や他校生徒と交流しながらの活動（清掃活動、接客）
・ニーズ調査をするのもよい。
・地域施設を利用し、学校のことを説明する。
・呉工業高等専門学校生徒と一緒に活動
・地域の様々な人材・素材を活用した場づくり
・商店街、駅など幼児児童生徒が直接つながっている場所との交流
・長期休みの過ごし方に着目し、地域の子供たちと・保護者同士の関わりの工夫

3 地域のパートナー

『地域の一員として！地域にとって必要な存在に！』

① 呉南ブランド

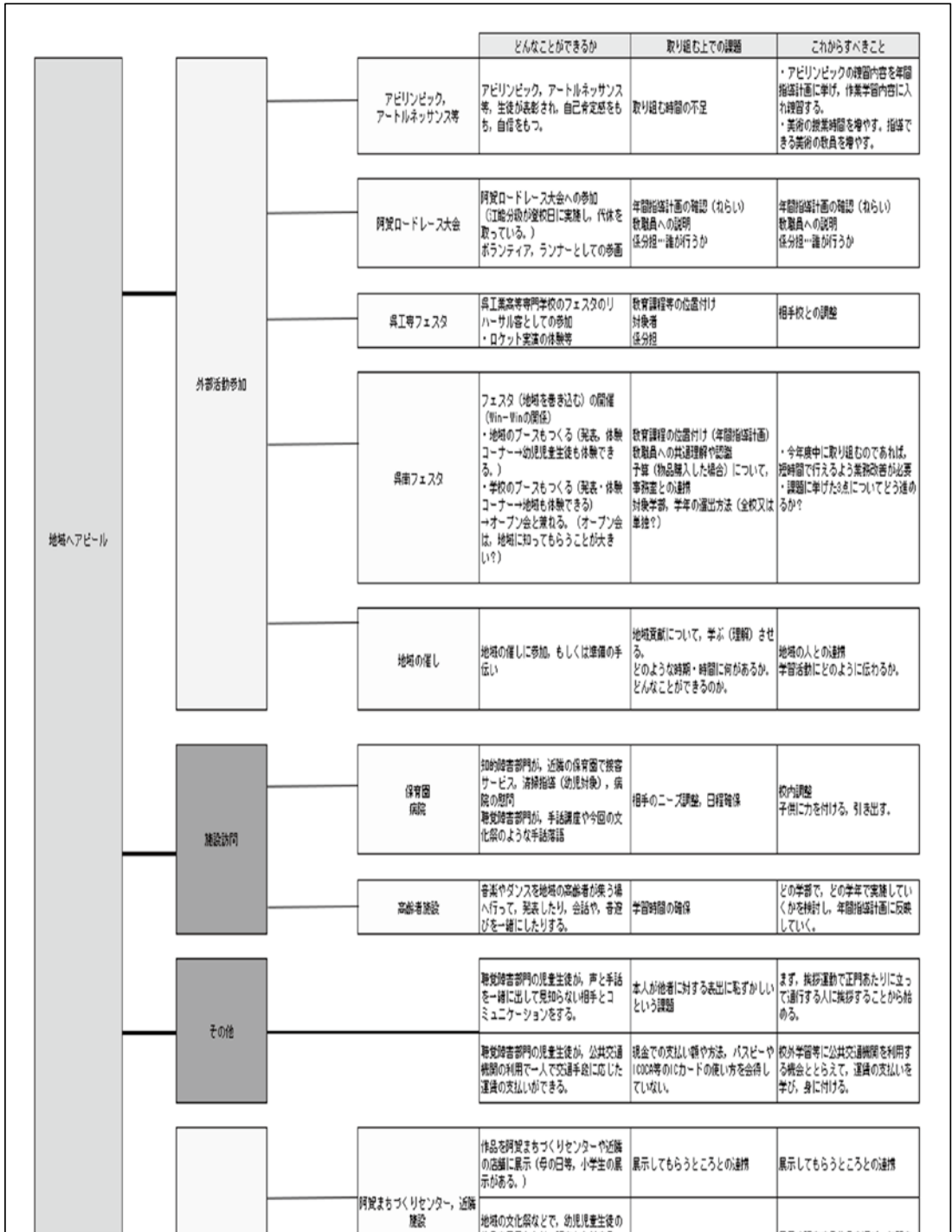
・呉南の子供に来てほしい

活動を進める上でのポイント

「何のために」「どんなことができ」その結果「幼児児童生徒の内面がどのように育ったか」

【資料2】

ロジック・ツリー「呉南特別支援学校の子供たちのために」の一部



Curriculum management at a special support school by the School Management Council: Analysis of planning and management utilizing facilitation skills

Makiko KUBO

Hiroshima Kenritsu Kureminami Tokubetsushien School

Keiko HIGASHIUCHI

Hiroshima Kenritsu Kureminami Tokubetsushien School

Takeshi CHIKURINJI

Department of Special Needs Education, Graduate School of Education, Hiroshima University

The revised elementary and lower secondary Courses of Study for special support schools (2017) calls for cooperation and collaboration between schools and their communities, and the implementation of curriculums that are open to society, with an aim to cultivate necessary qualities and abilities in children who are creators of the future. In addition, the documents indicate the pivotal importance of curriculum management, which creates a virtuous circle of improvement and enhancement of education in schools. In this regard, as of April 2019, “community schools” were established in Hiroshima Prefecture by the School Management Council to promote collaboration and cooperation between all prefectural-run schools and their communities.

This report describes the current state of curriculum management initiatives at Hiroshima Prefectural Kure-Minami Special Support School and the practices aimed at enhancing and improving education via planning and operations of the School Management Council, utilizing facilitation skills.

Keywords: curriculum management, School Management Council, facilitation